有意味的構築と発生的分析

── 理解社会学の現象学的基礎づけについて ──

小林 琢自

はじめに

1932 年公刊のアルフレート・シュッツ唯一の著作『社会的世界の意味構築』（以下、『意味構築』と略記する）は、マックス・ヴェーバーの「理解社会学」をフッサール現象学によって基礎づける試みであり、現象学的社会学誕生の書として知られている。しかしシュッツの死後、1970 年代に入り、未完草稿に関するワーグナー[1]やスルバール[2]らの研究によって本書の成立事情が明かされるにつれ、ベルグソン哲学から多大な影響を受けた時期を重視する傾向が生まれた。当時のシュッツが残した草稿群は確かに、彼が当初、現象学ではなくベルグソンの理論を考察の根幹にすえて理解社会学の諸前提を精査していたことを示している。本考察ではこの事情を踏まえつつ、とりわけヴェーバーの問題提起から発する現象学の独特の受容仕方と、『意味構築』第二章で詳述された内的時間意識をめぐる考察に注目することで、これを発生的現象学の知見による分節化総合の時間的な再解釈として、行為の意味連関の「構築」（Aufbau）の分析として捉え直してみたい。その際、第三章以降で展開された独特の他者理解論に立ち入ることは控え、彼がそれをどのような意図から現象学的心理学として位置づけたかということに絞って言及する。論述の順序は次のとおりである。**1.**『意味構築』公刊に至るシュッツの思索の変遷と現象学受容の経緯を事実関係から概観する。**2.**理解社会学の主題となる行為の“意味”概念を確認し、**3.** ベルグソンの生の哲学との接続、超越論的発生的現象学との接続を確認する。最後に **4.**『意味構築』第二章で展開された内的時間分析と発生的分析によって、シュッツが意味連関の構築の現場をどのように描き出したかを論じる。

1. 事実関係の確認

シュッツとフッサールの交流は『意味構築』公刊に際するフッサールへの献本を機に始まる[3]。同書の執筆当時、シュッツは[4]大学での身分を持たない「在野の研究者」[5]だった。

---

[1] Hermut R wagner, ”The Bergsonian Period of Alfred Schütz” in: *Philosophy and Phenomenological Research*, 38, New York, pp. 187–199.

[2] Alfred Schütz, *Theorie der Lebensformen, frühe Manuskripte aus der Bergson Periode*, herausgegeben und eingeleitet von Ilja Srubar, Suhrkamp Taschenbuch Wissenschaft, 350. 1981

[3] シュッツは 1932 年春に公刊された『意味構築』を、同年 4 月フッサールに献本した。これに対しフッサールが極めて高く評価しつつ面会を求めたことが二人の交流の始まりとなる（Dok III/4, 481ff.）。同年 6 月二人はフッサール邸で面会し、以後フッサールの死の前年まで知遇を得た。シュッツを受け入れたフッサール側の思想状況および人間関係についての簡潔な指摘は、浜渦辰二「フッサールとシュッツ―対話としての臨床哲学のために―」, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座編,『メタフィジカ』第 39 号, 2008, 16–17 頁.

[4]シュッツは学位取得以来、ウィーンの銀行に勤めながら研究を続け、ニューヨーク亡命後もこの二重

こうした事実が彼の現象学受容の特徴を規定している。つまり受容の内実は当時のシュッツが入手可能なフッサールの公刊作品に限定されていた[6]。さらにフッサールの著作の公刊時期と、シュッツの研究生活の場であるウィーンの知的風土が、彼の思索の変遷に大きく影響した。以下では、彼の思索を規定することになった三つの思想を受容の順に確認する。

1-1. ヴェーバー：理解社会学

シュッツの回想によれば、『意味構築』は彼の学位取得（1921 夏）から同書出版（1932 春）までの「12 年」間続けられた思索の成果である[7]。またこの思索を貫く根本的な問いの枠組みとなる「理解社会学」は最初に与えられていた。ウィーン大学在学時（1919-22）[8]の彼は、すでにこの大学を去っていた「ヴェーバーの“教育的カリスマ”の残響」[9]にさらされており、1922 年には論文「理解社会学の若干のカテゴリー」と「〔理解〕社会学の基礎概念」を収めた『学問論集』および『経済と社会』[10]が公刊された[11]。またシュッツは学位取得後も講義を受講しつつウィーンの幾つかの知的サークルにも参加していた。その内、ミーゼスが主催する個人的セミナーにおいて理解社会学は頻繁に議論されていた（Srubar, 1981, S. 20）。

1-2. フッサール：現象学 1

12 年の思索において、フッサール現象学もまた非常に早い段階で受容された。ウィーン大学の私講師だった F・カウフマンの勧めで、シュッツは 1922 年には既に『論研』第一・二巻、『イデーン』第一巻を読み始めていた。しかしこの最初の受容は消極的な印象に留まる。彼は「最大の注意を払ってそれらを研究した。だが、（略）私が関心を持っていた諸問題への橋渡しをそれらのなかに見出すことは出来なかった」と後に回想している[12]。この

生活を続けた。

[5] A シュッツ『社会的世界の意味構成』佐藤嘉一訳, 木鐸社 1982, 371 頁。

[6]『意味構築』本文中で引用・参照指示されたフッサールの著作は『論理学研究』第一巻・第二巻第四版（1928）、『イデーン』第一巻第三版（1928）、『内的時間意識の現象学』(1928)、『形式論理学と超越論的論理学』(1929)、『イデーン後書き』(1930)である。なお仏訳版『デカルト的省察』(1931)については「残念ながら草稿が完結した後で初めて入手した」(ASWII, 129, Anm., 59) という断りとともに、注での引用および参照指示に留まる。以下、シュッツ著作集（Alfred Schutz Werkausgabe）からの引用は ASW と略記しローマ数字で巻数、アラビア数字で頁数を記す。

[7] シュッツは様々な場所で『意味構築』執筆に 12 年を費やしたと述べる。例えば *Zur Theorie sozialen Handelns*. Briefwechsel / Alfred Schütz, Talcott Parsons, hrsg. u. eingel. von Walter M. Sprondel. Frankfurt am Main, Suhrkamp, 1977, S. 109. (Suhrkamp Taschenbuch Wissenschaft; 202).

[8] 森元孝『アルフレート・シュッツのウィーン ―社会科学の自由主義的転換の構想とその時代―』, 新評論, 1995, 30–31 頁.

[9] Helmut R. Wagner, *Alfred Schutz: An Intellectual Biography*, The University of Chicago Press, Chicago and London, 1983, p. 14.

[10]この二作品は『意味構築』欄外注記で「特に重要なもの」として参照指示された（ASWII, 85, Anm., 3）。Max Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft*, 1. Aufl., Tübingen, 1922. (=WG) , Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Tübingen, 1922.（=GW）.

[11] ヴェーバーは 1918 年ウィーン大学夏学期に講義した後、ドイツへ向かった。この講義と翌 19 年のミュンヘン大学での講義が、「理解社会学」を主題とする『経済と社会』冒頭章「社会学の基礎概念」の元となった（Marianne Weber, *Max Weber: Ein Lebensbild*, Tübingen, 1984, S. 688.）。

[12] アルフレッド・シュッツ「フッサールと彼がわたしに与えた影響」矢部憲太郎訳, 「文化と社会」

とき彼の関心は理解社会学が孕む哲学的諸問題に向かっており、現象学への関心は専らそれへの寄与にかかっていた。彼の現象学との関わりは『内的時間意識』講義の公刊（1928）までいったん背景に退き、代わりに“ベルグソン時代”(1924〜27）を迎える（Wagner, 1983, 21）。

1-3. ベルグソン：生の哲学

知的サークルの仲間E・フェーゲリンによって、ベルグソン哲学がもたらされた(Srubar, 1981, S. 21)。1924-25年頃から27年までに書き残した草稿群において、シュッツはベルグソンの純粋持続の概念を利用しながら考察を展開している。最大の草稿「生の諸形式と意味構造」[13]において、理解社会学の諸概念を個別に吟味する仕方ではなく、むしろヴェーバーが不問の前提とした“他者の主観的意味の理解可能性”という問題の哲学的探求、つまり「汝-体験」と「意味」とが概念化される以前の「前学問的」探求を開始している（ASWI, 65）。ところが「シュッツは1927年の暮れにこのプロジェクトで研究するのをやめたようだ。自らの哲学的心理学的出発点を再検査しつつ、彼はベルグソンを一時停止した」（Wagner, 1983, 21）。

1-4. フッサール：現象学2

『イデーン』第一巻（1913）以来の沈黙を破り1928年『内的時間意識』講義、その翌年『形式論理学と超越論的論理学』、翌々年『イデーン後書き』と立て続けにフッサールの作品が発表された。これらを入手したシュッツは再び現象学に立ち戻り、新たな仕方で理解社会学の基礎づけを企て始める。とはいえ、ベルグソン時代の研究成果は大枠において維持されていた。「ベルグソン哲学を研究したことによって下準備が出来ていた私には〔「内的時間意識」での〕フッサールの思想と言葉づかいが理解可能なものであることがただちにわかった」。「1929年に『超越論的論理学』が公表され、そこで間主観性の問題が焦点に据えられているのを見たとき、私は私の心を捉えていた問題全てにとってフッサールが有する重要性をはっきり認識した」。また先に受容された現象学の思想は、これら後期の作品によって再解釈されることになる。「『超越論的論理学』から出発して初めて私は『イデーン』の真の意味を学び理解したのです」（Dok III/4, 481-483）。

主著の執筆に費やした12年の思索において、シュッツはまず理解社会学が孕む哲学的問題に関心を抱き、その汝-体験と意味についての前学問的探求においてベルグソンの哲学に求めたものを後期フッサールの著作の内に見出し、再び『イデーン』第一巻以前の諸分析に立ち戻ったのである。

2. 理解社会学の主題と生の現実

シュッツの思索を根本的に規定するヴェーバーの問いとは何か。『意味構築』冒頭節に

Vol. 1, 1999所収，7頁.

[13] Lebensformen und Sinnstrukture と呼ばれる草稿は、全三部における未完の第一部に相当する。第二部は意味の対象化、第三部は社会科学の対象と方法を扱う予定だった。

おいてシュッツは理解社会学を、“意味”をめぐる同時代のドイツ社会学界に位置づけ、「あらゆる種類の社会的関係と社会形成物、あらゆる文化客観や客観精神の領域（Region）を個々人の社会的行為という最も根源的な出来要素にまで立ち戻らせる」というヴェーバーの「中心思想」、「原理」（ASWII, 85f.）こそが際立って重要だと述べる。この中心思想こそ、超越論的現象学の本分を発生的分析に見出すシュッツの解釈傾向を導くのである。この点は **3-3.** で詳述することとし、以下ではまず、行為の主観的な“意味”というヴェーバー理解社会学の主題を確認することで、理解社会学固有の主題とその射程を明らかにする。

2-1. 理解社会学における“意味”概念

ヴェーバーは理解社会学を「社会的行為（Handlung）を解釈（deuten）する仕方で理解し、それによって社会的行為の経過と結果を因果的に説明（erklären）しようとする学問」と定義した（WG, 1）。ここで言う社会的「行為」、その「解釈」的「理解」や、それに基づく「因果的」「説明」といった諸概念は、社会学で問われるべき特殊な「“意味”」(Sinn)、「主観的な“意味”」、「思念された意味」(vermeinter Sinn)と呼ばれるものをめぐって互いを規定しあっている。ヴェーバーはこれら諸概念を、「理解」の特性にしたがって次のように導入する。すなわち、様々な現象間で見出される「連関や規則性」の内で特に人間の「行動」（Verhalten）と呼ばれるものの間で見出されるそれは、「その経過が理解という仕方で解釈可能である」（GW, 428）という点で自然現象と隔たっている。また我々が人間行動の経過を理解し解釈できること、諸行動の経過に何らかの連関を見出す可能性は、最終的に、それぞれの行動に結び付けられた主観的な“意味”に基づいている、と。シュッツも指摘するように、ヴェーバーはここで「目的合理的」と呼ばれる理念型を行為の「原型」（ASWII, 100）として議論していた。よってここで言う行動の“意味”は最も典型的な場合、その行動の“意図”と読み替えることができるだろう。彼は単なる行動に対して、こうした主観的な“意味”が結び付いた行動、すなわち「有意味」（sinnhaft）な行動を特に「行為」と呼んで、これを「理解社会学の固有の対象」としたのである（GW, 429）。

2-2. “意味”概念の射程

ところで、理解における“意味”概念が指示するものは、諸々の「形成物」としての「“客観的な”意味内容」それ自体ではなく、それらと関わる個々人の体験経過という独特の主題の内部にある。ヴェーバーは論理学や法学、美学のような「規範学」とそれに対する理解社会学における考察方法の差異を論じている。

例えば法学は、諸々の「法命題」において国家や各種団体といった「集合概念」・「集合表象」を一個の法人格として取り扱う。法教義学において「法命題」は、「演繹推論的な解釈」によって論理的な正しさを導出可能な、「妥当すべき内容」・「“客観的な”意味内容」として考察される。だが理解社会学にとって「これら諸形成物はただ個々の人間の特種な行為の諸経過および諸連関であるに過ぎない」（WG, 6）。ここでは個々人の行為経過こそ「唯一のもの」(GW, 439)であり、上記の諸概念は個々の行為者における実際の表象としてそのつどの行為を方向づける限りで考慮されるか、あるいは理念型を形成する際のカテゴリーとして新たな意味合いで利用される。したがって理解社会学が立ち還るべき行為の

主観的な“意味”とは、意味形成物としての“客観的な”意味内容の個別事例ではなく、むしろそれらを形成する行為者自身の行為経過における具体的な連関の中に現われるのである。

2-3. 理解社会学の主題領野

だがヴェーバーの問題提起は、西南ドイツ学派に由来する認識論的枠組みから発せられている。理解社会学の具体的展開に先立つ諸論文[14]において彼は、「法則科学」と「現実科学」というリッカートの区分（GW, 7）を採り、自らの社会学を「生の現実（Wirklichkeit des Lebens）をその固有性において理解」する「現実科学」として特徴づけた（GW, 170）。生の現実は常に具体的・個体的・質的特殊性においてのみ与えられる「絶対的に無限な多様性」である（ibid.）。前者はこれを量化的演繹的な仕方で普遍妥当的な抽象概念や法則体系へと加工する精密自然科学の認識モデルを示す。他方、後者はそうした現実の質的特殊性を積極的に際立たせるべく、むしろ「一面的な観点」によって、「価値あり」とされる特性を「選び出し、分析し、叙述しつつ分節する」（ibid.）仕方で「加工」する。

ヴェーバーはこうした加工の基準となる「価値」に関わる多くの概念をリッカートと共有する。しかし彼が社会科学的認識に固有の“客観性”を論じる際、リッカート的な超越的価値の普遍性に依拠する傾きは見えない[15]。「何が探求の対象となり、その探求が因果連鎖の無限のどの範囲までにおよぶか、を規定するのは、研究者および彼の時代を支配する価値理念である」（GW, 184）。彼はむしろ、あくまで社会科学者が依拠する「価値理念」とその観点の具体性を「特殊な意味で主観的な」（GW, 213）価値関心として明示することで「価値自由」としての“客観性”を主張するのである。この意味でヴェーバーは一方で「生の現実」を加工するプロセスもまた具体的・流動的な姿において捉え、他方で社会科学的“客観性”を間主観的な視点で捉えようとしている。後の理解社会学においては、これが行為者の主観的“意味”として、客観的意味との対比において主題化されるのである。ヴェーバーの思索がカント的な客観（外）－主観（内）という二元論的前提の枠内でその力動的特徴を捉えていたことは疑いを容れない。だがシュッツにおいて“意味”という主題は、この「生の現実」という領野の内部から概念が産み出されるプロセスとして探求されるべきものとなる。

3. 生の哲学および超越論的現象学との接続

カント的な枠組みを踏襲しながら、理解社会学は行為の主観的な“意味”と意味形成物との差異と関係性において固有の主題を提示していた。ヴェーバーの「中心思想」に対するシュッツの強調は、彼がこの理解社会学固有の主題を継承したことを示している。シュッツにとって、ヴェーバーが示唆し、利用可能な種々の道具を開発しながら基礎づけ得なかったこの主題を「実際に基礎づけ」うるような「哲学的思索の次元を切り開」いた理論こそ「フッサールの超越論的現象学」だった（ASWII, 75）。ただし **1-2.** で見たように、現象学は当初からこうした役を担うものと見られたわけではない。その理由は、シュッツが

[14] 『学問論集』収録の論文「ロッシャーとクニース」（1903-06）および「社会科学と社会政策にかかわる認識の『客観性』」（1904）。両者は『意味構築』において参照指示された。

[15] リッカートの価値哲学からのヴェーバーの隔たりについては Fritz Loos, *Zur Wert und Rechtslehre Max Webers*, Tübingen, 1970, S. 12–16.

1920 年代のウィーンの知的潮流に対抗する形で、理解社会学に固有な主題の探求領野を「生」の「リアルな現実」（ASWI, 186）として受容し、ベルグソンの理論を用いてそこへ「哲学的」な問いを向けたことにある。

3-1. 生の哲学との接続

ベルグソン時代の諸草稿に示されるように、当時ウィーンの思想潮流をなした、コーエン、ナトルプ、カッシラーら新カント派の「認識論」やカルナップら論理実証主義の「論理学」といった基礎づけ理論はいずれも、シュッツの目には理解社会学の主題へのアプローチとして不適切なものと映った（ASWI, 187）。

シュッツは生と社会学の主題領野を等しく置いて次のように述べる。「認識論的根拠は、社会学の基礎的諸事実を説明するためには、不十分である。だから、生を、それゆえ社会学の基礎的諸現象をさらに高い基準で考慮する、別の哲学的態度を試みる」（ASWI, 180）。この「哲学的態度」はとりわけ、ヴェーバーの不問の前提を問いただすものである。「ヴェーバーにとっての所与は隣人（Mitmensch）、つまり汝だった。（略）次に、この汝が理解可能であることが（略）、事実だった。（略）だが汝の概念的把握によって汝が理解可能であることは前提されてはいても、明確にはされていない」（ASWI, 65）。シュッツの問いは“他者はどのような仕方で登場するのか”、次に“他者の抱く主観的な意味が理解されるのはいかにしてか”という形で「生の現実」の内に求められる。「この研究は『汝』と『意味』が第一に経験対象なのではなく、むしろ体験内容である、という思想から出発している。この研究は、それゆえこの内容を経験対象として学問的に概念化する加工より手前に意図的に、汝-体験と意味の『前学問的』探求を据える」。「この前学問的探求は体験、つまり自我に所属し、概念や経験対象からは遠く離れた、現象へと向かう。この自我が第一の内容として―ベルグソンが提示した―純粋持続を持っている」（ibid.）。

こうしてシュッツは「精神科学」を「生の科学」として捉え、持続、“意味”、汝-体験を固有の哲学的トピックとした。「このような問題形式〔において〕：基礎づけ連関、つまり認識論や論理学が最も基礎的なものであるなどということは断じてなく、むしろ上部構造（Oberbau）（特殊事例）なのである」（ASWI, 186）。草稿「生の諸形式」において、彼は「理念型的に構築された補助仮説」として 6 つの「生の形式」を、すなわち「自我の純粋持続」・「自我の記憶可能な持続」・「行為する自我」・「汝-関係を持つ自我」・「語る自我」・最上部に「概念的に思考する自我」を区分し論じようとしていた。だが実際の考察は、持続と“意味”にかかわる最初の三つの形式までで途切れるのである（Srubar, 1981, 37, 209ff.）。

3-2. 存在論的基礎づけへの批判

理解社会学の主題領野はベルグソンの持続の下で三つの哲学的トピックを探求する問題領野として捉え直された。この時期の、「認識論」への批判的文脈においてフッサールの名が現れる。「過去半世紀の哲学の展開は、精神諸科学には何も貢献し得なかった。その原因は、あらゆる体系が最終的にそれへと立ち還るカントが、数学的物理学の事実から出発したことにある。そこから、認識対象を形式的手続きにしたがって最小限のカテゴリーの下に配列するという野心が生じた。（略）（フッサール的に）本質にかなった仕方での存在論的諸分析によって最終的に両立しない諸領圏を確定することにしても、カテゴリー形成

やカテゴリー包摂にとっての無条件な普遍妥当性の形式諸法則を求め、普遍学を基礎づけようとするものである。両者の手続きは、死んだ世界における合法則性の探求という認識目的の故に、数学と自然科学にとって高度な価値〔がある〕。そうしたものは生きた、理解可能な事象領土、つまり精神科学的諸対象が問題になっているところでは、役に立たない」（ASWI, 185f.）。

ここで批判が現象学そのものでなく領域存在論の手続きへと向けられたことは強調すべきだろう。ここにシュッツの最初の現象学受容における消極的評価の内実が見受けられる。それは一方で、『イデーン』第一巻において社会学的現実が諸存在論との関係でしか扱われず、諸存在論に対する超越論的現象学の具体的寄与が明示されなかった点に由来していた。これはアメリカ亡命後の、E・シュタインらの手続きに対する批判的言及[16]にも通じる、社会科学的な主題領野についての現象学に対する正当な要求と言える。存在論的本質分析のみでは、理解社会学の要求する具体的力動的な主題を捉えられない。だから他方、この消極的評価は『イデーン』第一巻で展開された超越論的主観性のノエシス－ノエマ的構造分析が生の現実の有する力動的特徴を明確に示すに至っていない点にも関わる。

確認するならば、『イデーン』第一巻では「歴史学、文化科学、各種社会学的諸学科」等の「精神諸科学」（III/1, 11）が「世界」に関する自然的態度の学として、領域的・形式的存在論における純粋本質の普遍妥当性に基礎づけられ（III/1, 38）、両存在論はさらに、一切の世界的超越物の構成の場を主題化する超越論的現象学（III/1, 107）による基礎づけを待つとされた。しかし、形式的および領域的諸現実の超越論的構成の問題は『イデーン』第一巻の最末章において、両存在論を「手引き」・「構成的本質連関をあらわす指標」として利用しつつ基礎づけられるという形で（「精神」領域についての具体的な分析は『第二巻』で取り扱うとして）予告されたに過ぎない（III/1, 7）。逆に超越論的純粋意識の知見を「形相的心理学」さらに精神科学において「再解釈」する可能性も示されてはいるが、これは具体的には展開されていない（III/1, 159ff.）。さらに、上記の哲学的トピックとしての持続や“意味”汝-体験について、超越論的現象学はシュッツの関心に直接応えるようには映らなかった。時間構成については、『イデーン』第一巻の「準備的な分析」において「その分析の厳密さを損なうことなく時間意識の謎を、問題の圏外に置くことができる」として最小限の言及に留まり、1905 年の講義（『内的時間意識の現象学』）がそれを扱っていたことが欄外注に記されたのみである。また後の「イデーンへのあとがき」（1930）において不備が告白されたように、そもそもイデーンの還元の道（第二編第二章）には「超越論的間主観性」の問題への「明白な態度決定」が欠如していたのである（V, 148f., XVII, 275f.）。

3-3. 超越論的・発生的現象学との接続

ベルグソン時代のシュッツの議論から振り返って、『イデーン』第一巻が消極的な印象を与えた理由を、精神科学的現実の具体的分析は予告、時間構成に関わる分析は保留、汝-体験については不明という点に求めることも可能だろう。その後公刊された『内的時間意

[16]「常識的思考の諸々の不明瞭な観念や、経験的な社会諸科学の同じく不明瞭な諸概念に形相的還元の方法を直接適用することによって、社会諸科学の抱える具体的な諸問題が解決されうる」と考えるのは素朴すぎる、とシュッツは述べる（CP1, 140f.）。

識』おいては、保留されていた時間分析がベルグソン時代の準備に調和する仕方で与えられ（**4 -1, 2.**で詳述する）、『超越論的論理学』においては、素描と予告（XVII, 244ff., 250 Anm.）であるにせよ間主観性について超越論的な水準で言及されるに至った。ここでシュッツは現象学を理解社会学の基礎づけに相応しいものと認め、持続と“意味”に関わる発生的分析を自らの探求に引き入れる。特に発生という観点が理解社会学の主題領野と考察の水準を確定した。

シュッツは『意味構築』第一章の後半部において、ヴェーバーにおいて示された行為の主観的な“意味”と客観的な意味という未だ不明瞭な区分を、『超越論的論理学』における発生的現象学と静態的現象学との区分を利用することで再定義する。「“<静態的>分析は、思念された対象の統一によって導かれたり、不明瞭な所与様式によって導かれたりするが、志向的変様としてのそれの指示に従いながら、明確なものへとひたすら向かう。これに対し、他方、発生的志向性分析はすべての意識とその志向的対象そのものがそのつど立脚している具体的連関の全体へと方向付けられている”〔(XVII, 361)〕。このような諸々の構成現象は発生的な志向性分析において調査されうるのであり、そしてそうした諸々の志向性を把握することによって意味の発生は展開されうる。逆に完成済みとして与えられかつ構成された意味内実として見られるようなどの対象性も、〔やはり〕“その意味の歴史にしたがって問い尋ねる”ことが可能なのである。しかしもちろん孤独な自我はどちらの眼ざしの向け換えも可能である」（ASWII, 120）。

シュッツはフッサールの『超越論的論理学』から、「完成済み」（fertig）の志向的統一の内部に見られる「意味の歴史」やその発生的分析に関する記述を引きながら、これを①自我の純粋持続に準拠して主観的な“意味”の発生過程に眼ざしを向ける生（超越論的態度における発生的分析）と、②既に与件として構成されてしまった客観的意味の世界へと眼ざしを向ける生（自然的態度）、との区別に解して、主観的な“意味”を分析すべく意味の発生の現場①へ向かうのである。このとき、超越論的現象学と発生的分析とがほぼ同一視され、完成済みのノエマ成素としての「ノエマ的意味」は自然的態度における客観的な意味と同一視される。シュッツはまず②自然的態度についてこう記述している。「私は、既に構成され予め与えられているものとして私に現れる世界を見やることができる。（略）私はこの対象世界について〔それは〕意味に充ちている（sinnvoll）、しかも私にとってだけでなくあなたや我々や誰にとってもそうである、と言表できる。なぜなら、私がこの対象世界の意味を初めて構成する私の意識の作用を見やることをせず、最高度に錯綜した意味内実のシリーズを疑問の余地のない所与として前提しているから」（ibid.）。したがって「産出された、つまり産出のプロセスから切り離された意味形成物は或る客観的な意味を持ち、それ自体で意味に充ちていると言うことができる」（ASWII, 120）、と。これに対し①「私はまた、そこにおいて、それを通して意味付与を遂行する私の意識の志向的能作そのものにも配意（zuwenden）できる。そうすると私は（略）私の持続する流れの中でまさにはじめて構成され絶えず新たに構成される世界を眼前に所有する。（略）この世界も、反省的眼ざしにおいて覚知されうる意味付与的志向性によって私にとって意味に充ちている。したがって構成（sich konstituierend）される世界、絶えず構築（sich aufbauend）される世界として、私の意識生の最も根源的な事実を遡って指示しているのである」（ASWII, 121）。

具体的な行為経過の理解、しかも「生の現実」から諸概念が産出されるプロセスの内に

行為の主観的“意味”を見出す理解社会学にとって、その基礎づけという観点では、発生的志向分析こそが超越論的現象学の本領ということになる。『意味構築』第一章末尾の注釈で、シュッツは第二章から開始される考察の主題と自らの態度とを次のように表明した。「以下でわれわれが向かう内的時間意識における構成現象の分析は、意識の『現象学的に還元された』領圏の内部で成し遂げられるべきものである」（ASWII, 129）。これは「単独の自我における有意味的なものの構造」の研究であり、そこにおける「動機の意味連関」の研究なのである（ASWII, 209）。

3-4. 現象学的心理学との接続

シュッツは同時に、「ムンダンな社会生活における意味現象を分析する」意図において、第三章以降は「超越論的主観性と超越論的間主観性の問題については意識的に断念し」、「自然的態度における『現象学的心理学者』として」考察を進めることを表明した（ASWII, 129）。

持続と“意味”に関わるフッサールの時間分析がウィーンで研究を続けていたシュッツ自身の問題提起と企図とを充たすものだったことが、彼の現象学に対する期待と信頼を高めたとも考えられる。**3-1.**で見たようにベルグソン時代のシュッツは汝-体験については十分な議論を尽くしてはいない。フッサールが『超越論的論理学』における超越論的間主観性について問題提起し、欄外注にて「デカルト的省察」に属する諸研究の公開を予告したことをもって、シュッツが自らの超越論的考察の射程を行為の“意味”概念に絞り、汝-体験の考察を留保した理由と見ることもできるだろう。彼は“意味”に関する発生的考察の成果を、「他者」が既に「隣人」として共存する自然的態度の日常世界に挿入し、ここにおいてヴェーバーのもう一つの前提であった「他者理解」に関する考察を展開するのである（ASWII, 219）。

4. 行為の意味連関の構築をめぐる現象学的分析

『意味構築』第二章では、特に諸体験の意味連関の構築過程を問う「時間問題」（ASWII, 97）の追求として、「内的時間意識」をめぐる“反省的”諸作用の分析が、超越論的還元の枠内で進められる。またそうである限り、現象学者フッサールと理解社会学の基礎づけをねらうシュッツの射程は決定的に隔たっている。すなわち、内的時間意識を境に「構成」の始まりを遡及的に問う超越論的現象学のフッサールと、「構築」の進行を自然的態度で追跡するシュッツが居る。以下では、シュッツが内的時間意識の分析をどのように解釈し、理解社会学の諸概念を基礎づけていったのかを見たい。

4-1. 再生と体験の分節

シュッツはベルグソンの「純粋持続」をめぐる議論とフッサールの時間分析とを併記し、前者を後者によって、あるいは逆の仕方で理解し議論を展開した[17]。彼はフッサールにお

[17]1932 年のフッサールはこうした議論を抵抗なく受けとめたであろう。1918 年フライブルグ大学においてフッサールの審査に合格した R・インガルデンの学位論文「アンリ・ベルグソンにおける直観と知性」が同じ着想の元に書かれ、そうした議論の可能性をフッサール本人が認めていたことが、インガルデンの証言によって知られている。Phaenomenologica 25: *Briefe an Roman Ingarden*, mit Erläuterungen

ける「一個の統一的、均質的、客観的時間」（X, 69）の構成において前提となる「原的時間野」（originäres Zeitfeld）（X, 31）を、ベルグソンの質的多様な「純粋持続」と見なし、これだけでは絶えず経過する諸体験の明確な時間的配列つまり客観的時間、「時間（タン）」（le temps）が与えられないという点を強調する。「事実私は、私の持続の経過へと沈潜しているときには、相互に境界づけられたいかなる体験をも見出すことはない」（ASWII, 141）。これを分節し整序する意識が“反省”である。シュッツは「この持続の流れの把握はまた、持続の流れに対する振り返り、つまり自分自身の持続過程に対する特殊な見方を既に前提している。このことを私たちは“反省”と呼びたい」（ibid.）と述べ、「再生」（Reproduktion）、すなわち「再想起」（X, 35）および「予期」（X, 55）、「予想」（Vorerrinnerung）をまとめて「反省的」と呼ぶ（ASWII, 153）。

フッサールにとって、体験を「原的所与性」へともたらす「内的知覚」（III/1, 168）としての「反省」は方法論上その絶対的な権利が認められる[18]が、シュッツの関心はむしろ、反省的諸作用の“事後性”を重視し持続（デュレ）と時間（タン）の決定的な区別をなすベルグソンに与して、この意識の働きが様々な“完了的時制”において「有意味的体験」を分節し際立たせる点に向かっていた。「位相的に構築されたものは、今や反省もしくは再生（端的な把握（Zugriff）における）いずれかの配意によって、“完成済み”の体験として他のあらゆる体験から鋭く境界づけられるようになる。というのも、配意の作用（略）は、それが反省的性質であれ再生的性質であれいずれにせよ、或る流れ去った体験、生成し切った体験、完成済みの体験、要するに過ぎ去った体験を前提しているからである」（ASWII, 146）。よってシュッツの“反省”はそこにおいて「客観の同一性と客観的時間それ自体が構成される」（ASWII, 143）という再生一般の特徴によって捉えられる。

4-2. 行動と“意味”概念・行為と意味連関の構築

この再生による諸体験の「顕在化」を前提として「行動」や「行為」といった理解社会学の諸概念が基礎づけられる。シュッツはフッサールの分析に準じて諸体験を「根源的受動の体験」と、それに対する「態度決定」つまり「自発的能動性の意識」ないし「意味付与的意識体験」とに大別し、後者の諸体験を「行動」と呼ぶ（ASWII, 151）。ただし「持続経過の方向における生の内部には意味問題の余地はない」（ASWII,173）として、「前現象的能動性の体験ではなく、反省的に自発的能動性の形式で知覚された体験が意味に充ちている」（ASWII, 152）のであり、一貫して再生以前の体験については論じない。

この行動の内部に「行為」が区分される（ASWII, 152）。行為の特徴は、それが「企図」（Entwurf）つまり当の行動についての予想ないし予期、予料、としての想像[19]が先立って為された行動である、という点にある。企図は必然的に「空虚箇所」を含むから（ASWII,

---

und Erinnerungen an Husserl, Hrsg. Roman Ingarden, Martinus Nijhoff, Den Haag, 1968.

[18]フッサールも『イデーン』第一巻において、反省が原的時間野の多様体構造において条件付けられていること、つまり“事後性”に言及している（III/1, 166f）。

[19]「措定的準現在化の中立性変様としての想像と設定立的準現在化としての予想」とは区別されない（ASWII. 155 Anm.）。

163)、遂行される行為に対して充実・非充実の関係にある（ASWII, 205）。こうした一個の行為の過程全体はすでに、それぞれ個別に際立たせられた企図と企図された行動という複数の体験から成る総合的な対象性である。シュッツはここで『イデーン』第一巻の記述に拠って、諸体験のこうした「高次段階の総合的作用」ないし「複定立的」（polythetisch）な総合による対象性を確認し、さらにこれを一条の再生的な眼ざしによって再び「単定立的」（monothetisch）に把握する可能性（ASWII, 170f.）を示す。「行為は遂行されてしまえばすぐに、企図から実行までが統一的になる。なぜなら自我の単一の眼ざしの光線によって、行為はそれが構成された諸々の位相を顧みることなしに、把握されるからである」（ASWII, 172）。

こうした行動や行為といった有意味的な体験同士の総合と統一こそ、「意味連関」の「構築」に他ならない（ASWII, 181）。標題にも見られるこの「構築」という概念はここで『イデーン』第一巻の「分節化総合」（gegliederte Synthese）、つまり「非連続的に断絶された諸作用」同士の統一を可能にする「高次の秩序の作用」（III/1, 247）を指すことになる。論理学における「“名辞化”の法則」（ibid.）とも記されたこの作用は、『超越論的論理学』においては意味形成物が内含する「意味の歴史」・意味の発生を遡行的に問う発生的現象学的な文脈において語られる（XVII, 214ff.）。だがシュッツは特に『イデーン』第一巻の記述を引くことで、再生的作用が諸体験をそのつど構造化してゆく「有意味的構築」のプロセスとして確認する。そしてこれに拠って発生的遡行の可能性を「解釈」（Deutung）という作用の枠内に捉え直すのである。

4-3. “歴史”の解釈における二つの動機づけ連関

シュッツは、高次の対象を構築する一条の眼ざしにとって個々の対象はその産出プロセスが顧みられない「蓄え」（Vorrat）、「予備知識」（Vorwissen）として「受動的に所有」され、再び能動性へと移し替え可能であること（ASWII, 183, 188）を示し、「成層化」された諸体験の構造を意味の歴史（ASWII, 187）と呼ぶ。ただし上述のように、彼の分析は専ら再生的諸作用の内部に定位するから、この「習慣性」としての歴史に関しても、再想起あるいは企図においてそのつど具体的な連関が際立たされる現場、つまりその具体的「解釈」が問われていると言わねばならない。「解釈とは、未知のものを既知のものへと連れ戻すこと、諸々の配意において把握されたものを経験図式に連れ戻すことに他ならない」（ASWII, 192）。シュッツは最上位の意味連関である「経験連関」（ASWII, 182）への新たな体験の組み入れを「自己解釈」（Selbstauslegung）、その下位連関である様々な「経験図式」への組み入れを解釈と呼んだ。

行為の“意味”概念は、今や歴史を構築する具体的な仕方、つまりそのつど際立たせられる具体的な意味連関の解釈仕方を指している。シュッツの発生的分析は“意味”解釈の枠内に留まる限り、絶え間なく「構成され」「構築され」（sich aufbauen）る世界の起源へ、つまり「純粋持続における経験作用の構成」への遡行を意図してはいない（ASWII, 187）[20]。むしろ日常世界や社会科学において問われる人間行為の“意味”とその理解によって、再び

[20]フッサール的な再帰動詞形の「構成」概念に関する、シュッツの理解と態度の変遷については、浜渦, 前掲書, 17–19 頁。本考察はこの「構成」内部の「構築」の射程を論じている。

日常世界や社会科学的世界が構築されてゆくその進行を追跡するためにあった。彼が追求したこの主題領野は、『意味構築』執筆当時に閲覧し得なかった『イデーン』第二巻の草稿[21]において、フッサールが描き出していた「精神世界の基本法則」（IV, 90）としての「動機づけ」の射程内にある。フッサールにとって「動機づけ連関」は精神世界における主体としての「人格」と「人格的な意識の志向的対象性」との「『志向的』関係」（IV, 219）を意味し、自我の個体性を示す習慣性の内部構造である（IV, 297, 299）。シュッツはまさに、受動的系列としての「連合」や「習性〔慣れ〕」（Gewohnheit）とは区別される、態度決定的作用間における動機づけ（IV, 222）の中に、時間的な構築様式から捉えられる特殊な類型を見出すことになる。すなわち、行為と呼ばれる体験に固有な 2 つの動機づけ連関である。一方で「目的動機」連関とは、企図と行為の意味連関そのものを指す。「（略）未来完了時制的に経過したとして企図される行為が、行為者にとっての動機（即ち『目的動機』）である」（ASWII, 197）。ここでは企図が行為の“意味”として、その行為を動機づけている。他方の「真の理由動機」と呼ばれる連関は、企図とそれに先行する諸体験との意味連関を指す。目的動機とは違い、先行する諸体験と企図との間には充実・非充実の関係は無い。ここでは「過去完了時制的に」配意する眼ざしによって際立たせられた体験が企図と行為の“意味”となるのである（ASWII, 207f.）。

おわりに

ヴェーバーは、理解における主観的な“意味”と客観化された意味形成物との差異と関係性において具体的力動的な固有の主題を提示していた。シュッツの試みは当初、この主題を受け継ぎつつベルグソンを援用することで生の現実へと考察の領野を移し、そこにおいてヴェーバーが前提とした汝-体験と“意味”を問うものだった。彼にとって 1928 年以降のフッサールの公刊作品における時間的、発生的分析は、自身の目論見と準備の正しさをより精緻な分析によって裏付けるものだった。『意味構築』において、シュッツがフッサールの発生的分析を援用することで解明した行為の主観的な“意味”とは、個体的自我の習慣性の内部にそのつど見出され際立たせられる意味連関の具体的な諸相である。特に目的、理由という二つの動機づけ連関は時間的な構築様式に即して問われた特殊な意味構造の類型であった。シュッツの考察は“意味”とその理解という理解社会学固有の主題の枠内にあり、構成の起源を問うフッサールの発生的考察とはベクトルを異にしながら、人間行為とその日常的理解による生活世界の具体的で力動的な有意味的構築の進行を描き出すものであったと言えるだろう。

---

[21] 精神世界の基本法則として動機づけ概念が主題化された『イデーン』第二巻の草稿は 1952 年にフッサール全集第 4 巻として刊行された。シュッツは同年 4 月にこれを入手している。「〔『イデーン』第二巻で〕フッサールが述べている多くのことが、私のこれまでの研究において予料されていたと、安心して言えると思います」。Richard Grathoff Hrsg., *Alfred Schütz Aron Gurwitsch Briefwechsel 1939–1959*, Mit einer Einleitung von Ludwig Landgrebe, Wilhelm Fink Verlag, München 1985, S.281.